日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館

令和３年 第３回特集展

# 帆足萬里のこころ

## ー学びと人のつながりー

2021 11/16(火) ▼ 2022 2/27(日)

帆足萬里 没後 170 回忌 記念事業

主催 日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館
日出町教育委員会文化・スポーツ振興課

## 郷土日出の碩学 帆 足 萬 里

安永 7(1778) 年、帆足萬里は日出藩士帆足通文の三男に生まれました。帆足家は代々藩の要職を勤めた名門で、父通文は萬里が 19 歳の時に家老に抜擢されました。また、彼は大変学問を好み、三浦梅園などの学者と盛んに交流し、萬里も幼い頃は父から学問の手ほどきを受けていました。このように萬里は、学問人として育まれるべく恵まれた家庭環境にあったといえるでしょう。

萬里 14 歳の頃、小浦に住む脇蘭室の塾 ( 菊園 ) に入門しました。萬里はこの塾で約 8 年間、蘭室からの学問に対する基本的な姿勢や考え方などを学びました。

萬里は、その生涯の中で医学や政治・歴史・文学・道徳など多岐にわたる分野の書物を著しました。その中でも代表的な著作が「窮理通」です。「窮理」とは今でいう自然科学 ( 天文・物理・化学など ) の分野をさします。萬里は三浦梅園や脇蘭室の影響で、自然科学を学ぶことを志したといわれています。

学者・教育者としての人生を歩み続けた萬里でしたが、天保 3(1832) 年、萬里 55 歳の時に 13 代藩主木下俊敦の再三にわたる要請に応じて家老に就任しました。萬里は当時、逼迫していた日出藩の財政を立て直すために、現状を深く分析した上で藩政改革に乗り出しました。その内容は綱紀の粛正・支出の節減・風俗の改革・賞罰の励行からなるものでした。この改革により一定の成果が得られたものの、藩の内部からは萬里の改革への厳しい不満が噴出しました。そのためもあり、天保 6(1835) 年、萬里は家老の職を辞すことにしました。

家老の職を辞した後、萬里は南端 (大字南畑) に私塾「西崦精舎」を開き学問と門弟の指導に没頭する日々を送っていましたが、弘化 4(1847) 年、70 歳に至って突然妻と門弟数名を伴い脱藩し、京へ向いました。

京から帰藩した後、著述と門弟の指導に励む日々を送りましたが、嘉永 5(1852) 年 6 月 14 日、前年から発症していた病との闘いの末に 75 年の生涯を閉じました。

帆足萬里石膏像

### 帆足萬里の生涯とその著作

| 西暦 | 和暦 | 年齢 | 事項 |
|---|---|---|---|
| 1778 | 安永 7 | 1 | 豊後日出藩に生まれる |
| 1780 | 安永 9 | 3 | 三浦梅園(晋)の帆足家訪問に同席する |
| 1789 | 寛政元 | 12 | 三浦梅園没 |
| 1791 | 寛政 3 | 14 | 脇蘭室(愚山)に師事する |
| 1796 | 寛政 8 | 19 | 父通文、家老となる |
| 1798 | 寛政10 | 21 | 父に随行して大坂、京都に遊学<br>中井竹山、皆川淇園を訪ね、教えを受ける |
| 1800 | 寛政12 | 23 | 学問出精により、四人扶持を与えられる |
| 1801 | 享和元 | 24 | 筑前に亀井南冥、日田に廣瀬淡窓を訪ねる<br>『肆業餘稿』を起草する |
| 1802 | 享和 2 | 25 | 正月、京へ遊学<br>この年より藩から毎年書物料二両を賜るようになる |
| 1803 | 享和 3 | 26 | 中の丁に屋敷を賜り家塾を開く |
| 1804 | 文化元 | 27 | 藩学教授に登用される(七人扶持)。邸内に藩費を以って、学舎一棟を建てる(稽古堂) |
| 1807 | 文化 4 | 30 | 父通文引退し、兄通億武頭となる<br>『蘭室集略』の序文を撰す |
| 1808 | 文化 5 | 31 | 『肆業餘稿』をまとめる |
| 1810 | 文化 7 | 33 | 『修辞通』と『窮理通』初稿を著す<br>12月、中の丁より三の丸に移る |
| 1811 | 文化 8 | 34 | 父通文、死去 |
| 1812 | 文化 9 | 35 | 『日出孝子伝』を和文に訳す |
| 1813 | 文化10 | 36 | 医学を志す。給人(70石)になる |
| 1814 | 文化11 | 37 | 脇蘭室、死去 |
| 1817 | 文化14 | 40 | 門弟勝田季鳳に口述し、『窮理小言』を筆録させる |
| 1819 | 文政 2 | 42 | このころからオランダ語を独習 |
| 1822 | 文政 5 | 45 | 3月3日　田能村竹田が萬里邸を訪問 |
| 1832 | 天保 3 | 55 | 藩主木下俊敦の懇請により家老となり、藩政改革に着手する<br>二の丸に移る<br>2月12日　家老を辞す |
| 1835 | 天保 6 | 58 | 5月　二の丸から中の丁の旧宅に移り家塾を再開<br>『三教大意』を著す |
| 1836 | 天保 7 | 59 | 新稿『窮理通』八巻を著す<br>廣瀬淡窓の『遠思楼詩集』序文を撰す |
| 1841 | 天保12 | 64 | 『井楼篤聞』・『巌屋完節志』の漢訳成る |
| 1842 | 天保13 | 65 | 南端村目苅に私塾(西崦精舎)を開き、門下生とともに同地へ移る |
| 1843 | 天保14 | 66 | 『入学新論』を著す |
| 1844 | 弘化元 | 67 | 『東潜夫論』を著す |
| 1846 | 弘化 3 | 69 | 『医学啓蒙』を著す<br>4月10日　妻および門弟数名を伴い脱藩する |
| 1847 | 弘化 4 | 70 | 5月　京に入り、東福寺栖薪亭に寓居す<br>10月　『帆足先生文集』・『仮名考』を出版 |
| 1848 | 嘉永元 | 71 | 3月10日　京から帰藩し、西崦精舎へ戻る<br>吉田快助の長男・民二郎を養子にする |
| 1850 | 嘉永 3 | 73 | 弟子の野本白巌、萬里の意を受けて徳川斉昭(水戸藩主)に海防策の建白を試みるが果たせず |
| 1851 | 嘉永 4 | 74 | 西崦精舎にて発病、二の丸に帰って静養する<br>3月 法華寺塾に着手。『四書五経標註』を刊 |
| 1852 | 嘉永 5 | 75 | 4月　病気が再発し、再び二の丸に戻る<br>6月14日、闘病の末に死去 |

# Ⅰ　学問のめばえと探求

## 就学のめばえ

帆足萬里が塾生として学問を修めるはじまりは、寛政3（1791）年の14歳のことです。この時萬里は、小浦（現日出町小浦）で脇蘭室（1764～1814）が開いていた私塾「菊園」に入門しました。蘭室の塾では、主に修辞（作文法）に重点を置いた方法で弟子たちを教え、塾生一同で詩会を頻繁に開き、自らの学問の基礎を築きます。この修学法は、萬里にとっても相性の良い方法であったようで、『肄業餘稿』で萬里は、「先生の授ける作文法により、頭の悪い私であっても今に至るまで文章に関して大いに難解であると苦しむことがなかったのは先生のおかげである」と記しています。

萬里が蘭室の私塾へ通う生活は7年ほどの期間でしたが、その後も萬里は時々蘭室のもとを訪れ交流を続けました。文化5（1808）年『肄業餘稿』の跋文や文化7（1810）年の『修辞通』『窮理通』の序文で蘭室は弟子である萬里の学問へ姿勢を高く評価しています。萬里も『蘭室集略』に跋文を寄せているほか、蘭室の母親の古希を祝う和歌を送っています。

萬里は、蘭室の亡き後も彼に対する尊敬の気持ちを持ち続けており、「奉哭蘭室先生」（「蘭室先生を哭いて奉る」）、「祭愚山先生文」（愚山先生を祭る」）といった追悼の詩を作っています。

## 独力で学問を学ぶ

萬里の学問への探求心は修学を始めたころから盛んだったようで、『帆足萬里略伝』（昭和26年刊行）には、本を読む速さも一日400枚以上だったという話が紹介されています。また、『帆足文簡先生墓碑銘』にも弟子の米良東嶠（1811～1871）が「一度見聞きしたことは亡くなるまで忘れていなかった。幼くして蘭室先生に学び、十五に達した頃にはたくさんの書について詳しく知り、毎日数多くの言葉を使って根気よく文章を作った」と述べており、萬里は若い時分から多くの書物に触れ、知識を吸収していったようです。

この探求心は、時に自ら必要とする学問に対して独力で学ぶ意思として表出します。萬里は『窮理通』を一度著しましたが、西洋の自然科学の知識が必要であると判断し、その書を廃します。この時萬里はすでに40歳を過ぎていましたが、蘭学者藤林普山（1781～1836）の作った蘭日辞書『訳鍵』を手に入れ、苦労を重ねながらオランダ語を独力で学び、蘭書から直接自然科学の知識を学び直し『窮理通』を書き直したのです。

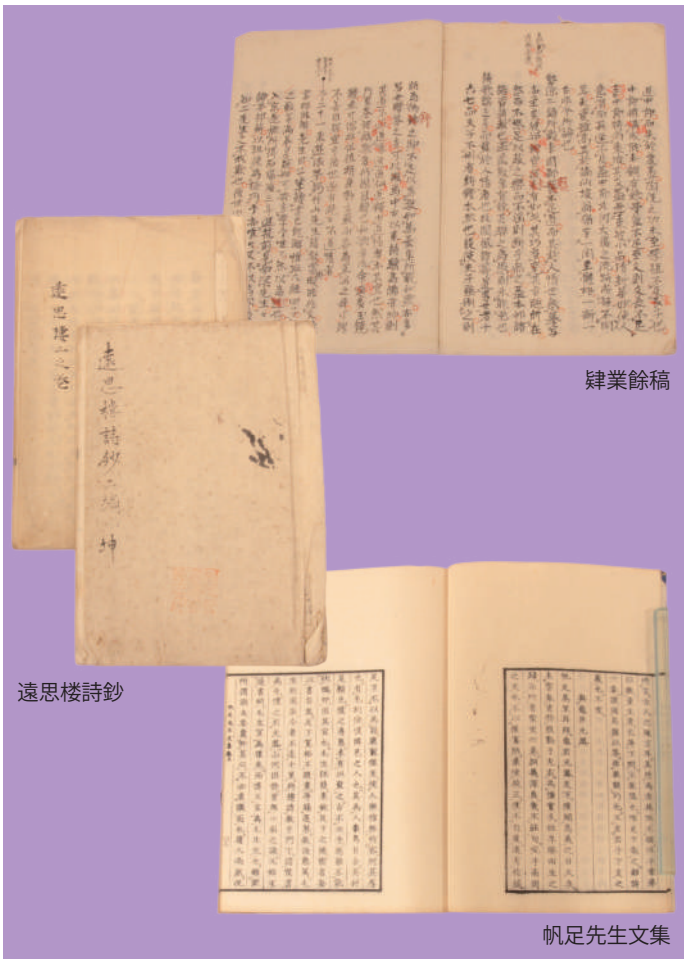
この独力で学ぶ姿勢は、弟子たちの育成にも表れており、弟子の賀来佐之（医者）に医学を教えるため、自ら『解体新書』などの西洋医学と『傷寒論』などの漢方について学び始め、それぞれの利点についてまとめられるほどになっていました。萬里は、独学であっても弟子に教えることができるほど、深く理解する努力を惜しみませんでした。

# Ⅱ　学びから広がる人脈

## 遊学で得た学びと新たな出会い

萬里が脇蘭室の私塾を出た寛政10（1798）年、藩命で大阪へ行く父通文に同行し京・大坂を遊学します。まず、蘭室の師であり、懐徳堂の学主（教授）であった大阪の中井竹山のもとを訪れます。その後、弘道館の創立者で京都を代表する儒学者であった皆川淇園（1734～1807）の門にも出入りしていたようですが、「何ら得るものはなかった」と評しています。当時の萬里にとってこの時の遊学は、本人の期待していたものと異なっていたのかもしれません。

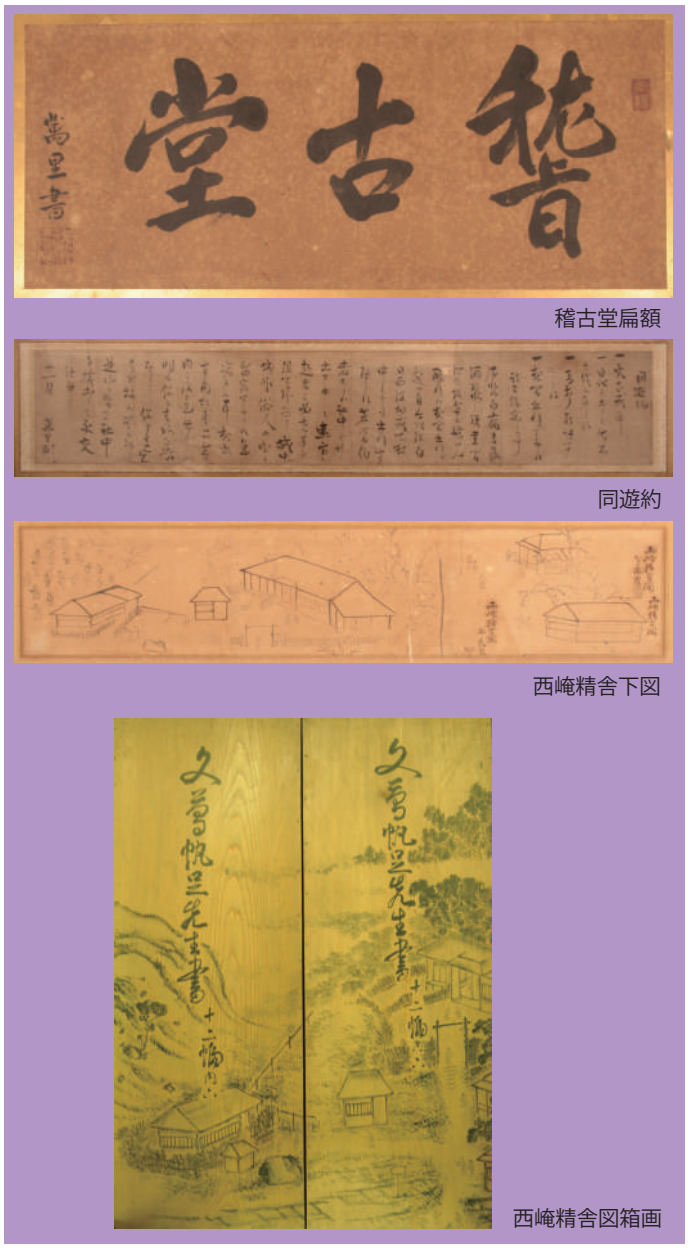
享和元（1801）年には、福岡・日田へ行き、福岡では亀井南冥・昭陽親子の亀井塾を訪れます。道中では、日田の広瀬淡窓のもとも訪れており、ここでの遊学では、昭陽・淡窓という、後に共に学者として認め合う仲となる人物と出会いました。




肄業餘稿

遠思樓詩鈔

帆足先生文集



稽古堂扁額

同遊約

西崦精舎下図

西崦精舎図箱画

## Ⅲ　弟子と共に学ぶ

### 弟子とともに学ぶ

遊学より戻った萬里は、享和 3（1803）年日出の中ノ丁に家塾を開き、後進の育成を始めます。翌、文化元（1804）年には、日出藩教授に取り立てられ、萬里の邸宅内に藩校として学舎が建てられ「稽古堂」と呼ばれました。「稽古堂」で藩内の弟子たちを教えるのと同じく、私塾へも萬里を慕って各地から入門するものが集まりました。

萬里の塾では、修辞（作文法）を第一に、漢籍を読み解くことを行いました。『修辞通』には、「幼いころから少しづつ読める字を増やしていき、千字以上に至れば、人に教えてもらわずに四書もおおよそ一人で読めるようになる」と述べており、より理解するために萬里は弟子たちに中国古典を漢訳をさせるよう命じています。また、古典や漢籍による知識だけでなく、実用の学も必要であると考えていたため、窮理学（自然科学）や算術等も教えました。このほかにも心身の鍛錬として相撲や、山野を歩くことなども奨励しました。

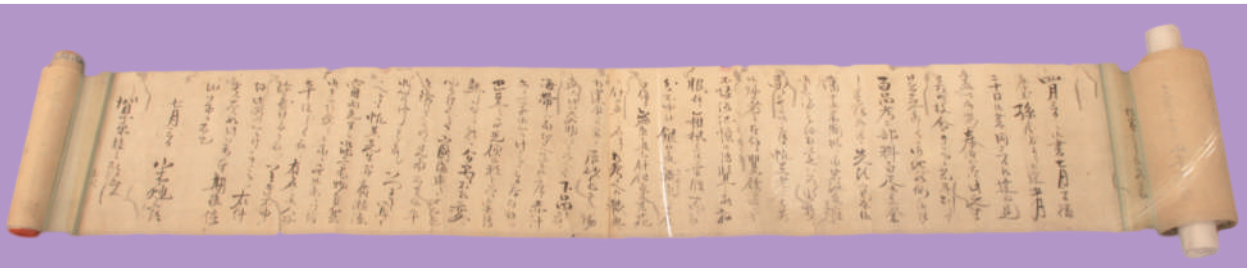
萬里が 65 歳の時に目刈に開いた私塾「西崦精舎」には、長年の弟子たちも訪れ、学問に留まらず、時事についても語り合い、互いにに知識を広めていきました。弟子たちの中からは、医学・語学・兵学など各分野に長じた人物が多く育っていきました。これは、弟子たちとよく語り、関わり合うからこそ長所を見つけ、その点を伸ばせるよう取り計らうことができたからではないでしょうか。

## Ⅳ　晩年の京都出奔

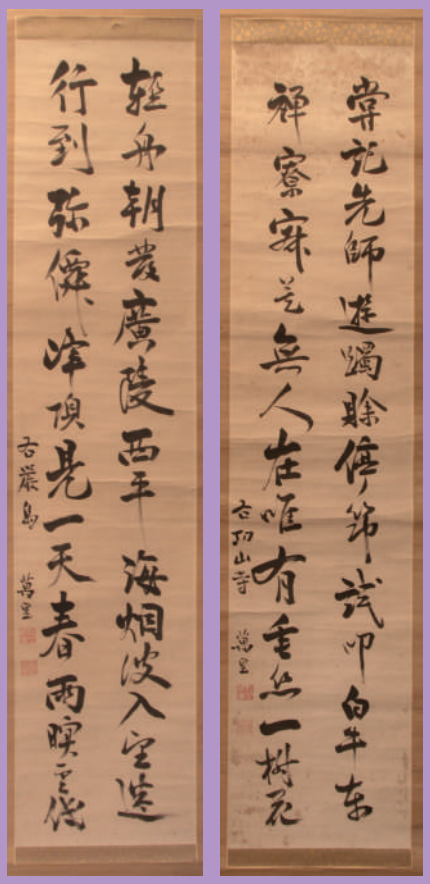
### 萬里晩年の決意

弘化 4(1847) 年、萬里は、妻と弟子を連れて京へ向かいます。この行動は、藩主の許しを得ていない状況だったので、他藩でいうところの脱藩になります。勝田安石にあてた書簡によると、「国のために出奔したのであって、決して自分のためではない」と書いています。

京に到着した萬里は、弟子の宗栞亭（1804 ～ 1862）の支援により東福寺の采薪亭に逗留します。在京中は各地の景勝地などを訪れた他、京阪在住だった弟子たちが出入りし、萬里を追うように日出から上京する弟子たちに加え、京や西国の人々が教えを請いに萬里のもとを訪れたようです。本草学者の山本亡羊・榕室親子も、萬里の弟子であった賀来飛霞を通じて交流をしています。



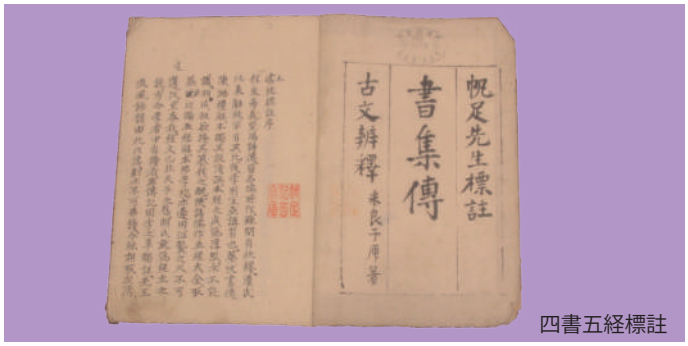
山本榕室書状



帆足萬里詩文（左：厳島　右：功山寺）

崕精舎の環境に高齢の萬里は徐々に堪えられなくなってしまったようです。体調を崩した萬里は、嘉永 4（1851）年の 12 月、西崕精舎を離れ、二の丸の邸宅に移ります。亡くなる直前まで弟子たちの来訪を受け入れており、嘉永 5(1852）年の 3 月に『四書五経標註』を刊行し、弟子の野本白巌がアヘン戦争に関する書『犯境録』の和訳書『犯境録評注』を持ってきた際に目を通し、最期まで弟子と共に学問に対しての研鑽を続けました。

萬里の多岐にわたる活躍の根底には、学問への知識を求めるこころがあったのではないでしょうか。その学問を希求する姿勢は、弟子のみならず、現代の私たちまで魅了していったのです。



四書五経標註

出奔した萬里に対し、日出藩主木下俊方は、日出に帰藩するよう促す書簡を萬里に送っています。嘉永元（1848）年、萬里一行は日出藩に戻りますが、帰りの道中に作った詩には、もの寂しさが残る風景が切り取られており、当時の萬里のこころをあらわしているのかもしれません。

## V　終わらない学問への探求心

### 萬里の学問のこころと後世への影響

日出に戻った萬里は、再び西崕精舎で弟子の育成と、『医学啓蒙』の刊行や『東潜夫論』を部分的に訂正を入れるなど、自らの学問への深い理解に努めました。やがて西

**[展示資料]** ※順不同

| | |
|---|---|
| ◆題窮理通 | 当館蔵 |
| ◆窮理通 | 当館蔵 |
| ◆東潜夫論 | 当館蔵 |
| ◆醫学啓蒙 | 当館蔵 |
| ◆肄業餘稿 | 当館蔵 |
| ◆遠思楼詩鈔 | 当館蔵 |
| ◆帆足先生文集 | 当館蔵 |
| ◆稽古堂扁額 | 個人蔵 |
| ◆同遊約 | 当館蔵 |
| ◆西崕精舎下図 | 個人蔵 |
| ◆西崕精舎図箱画 | 当館蔵 |
| ◆山本榕室書状 | 大分県立歴史博物館寄託 |
| ◆帆足萬里詩文厳島 | 当館寄託 |
| ◆帆足萬里詩文功山寺 | 当館寄託 |
| ◆四書五経標註 | 当館蔵 |

**日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館**

【開館時間】9：00 ～ 17：00　※入館は 16：30 まで
【休 館 日】月曜日（祝日の場合はその翌日）
年末年始（12 月 29 日～ 1 月 3 日）
【住　　所】大分県速見郡日出町 2602 番地 1
TEL0977-72-6100　FAX0977-72-6103

■所管課　日出町教育委員会
文化・スポーツ振興課（文化財係）
〒879-1506 大分県速見郡日出町 3891 番地 2
TEL0977-73-3222　FAX0977-72-8680